

# 80億人の旋律



スペインの建築家アントニ・ガウディの墓の傍らに設置されたパイプオルガンの音色が広がる。その奏楽に合わせて、日本語の合唱がバルセロナの世界遺産サグラダ・ファミリア教会の地下聖堂に響きわたった。「生きて愛して祈りつつ」。

## 心に響かせたい

サグラダ・ファミリアは「未完の聖堂」と呼ばれ、着工から140年以上たった今も完成していない。5月下旬、その心臓部に当たる地下聖堂で、日本人クリスチャンを中心とした祈りの会が開かれた。上部の窓から地下まで届く日差しを受けた主催者、下山由紀子(58)の笑みがこぼれた。

下山は10代の頃に遭ったいじめがきっかけでクリスチャンになった。自死さえ考えるほど悩んだ末に出会った教会音楽の旋律に心を打たれ、

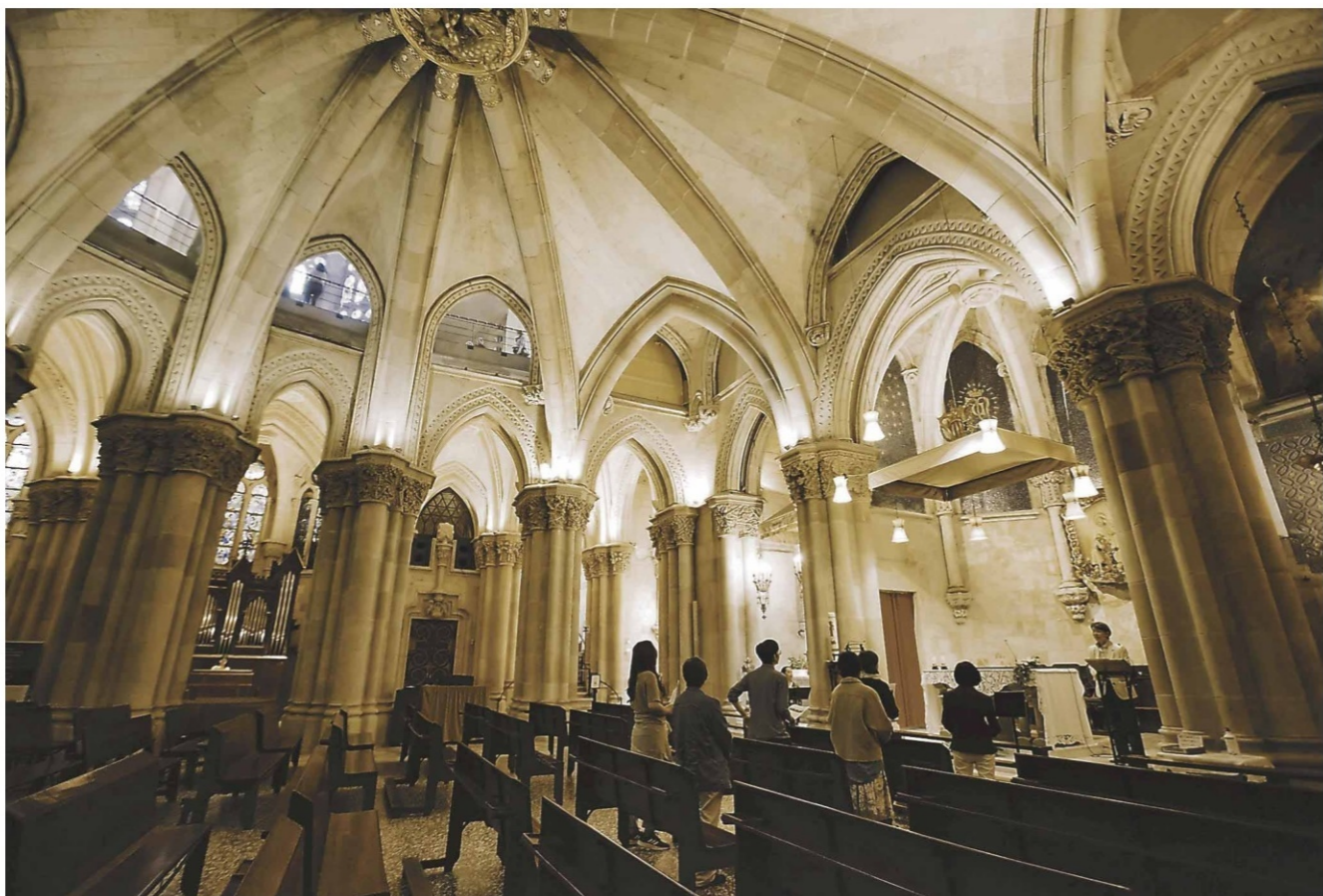
地元横浜市の教会に通い始めた。賛美歌に接するうちに、生きる活力が湧いてきたという。

企業に就職した後、1990年にスペインに渡ったが、日本語を使っている教会は見つからなかった。賛美歌は、歌い手が自ら神に歌を届けるためのものだ。だが、「スペイン語が十分に理解できず、歌っても文字を追うだけで全く心に響かなかった」。

ほどなく、日本人駐在員の家庭で祈りの集会が開かれていることを知った。出席し、日本語で賛美歌を歌うと「魂の底から」声を出せることを実感した。

こうした経験に突き動かされ、93年に下山は聖職を志して帰国するが、現在の夫であるスペイン人男性から求婚され、バルセロナへ戻る。同じ頃、集会を立ち上げた駐在員一家の転居が決まり、集会の主催を

# 異国に響く日本語の賛美歌



日本語の賛美歌が響きわたった世界遺産サグラダ・ファミリア教会の地下聖堂。立ち止まって聞き入る観光客らの姿も見られた =バルセロナ (共同)

## スペイン・マドリード、バルセロナ

引き継ぐことを決意した。95年のことだった。自分同様、言葉の壁に悩む人たちの助けになれば、という思いからだった。

以来、常時参加するメンバーは10人に満たないものの、駐在員や留学生らが原則毎月1回、下山の自宅で聖書を学びながら祈りをささげている。

## 父の詩を歌詞に

集会を通じて、下山はピアノリストで作曲家でもある鈴木羊子に出会う。バルセロナ在住の鈴木は、サグラダ・ファミリアを含む複数の教会でオルガニストを務めている。地下聖堂で歌われた賛美歌のうち、2曲は鈴木が2020年に作った新しい歌だ。

1曲目の「生きて愛して祈りつつ」は、合唱に向くよう輪唱できる部分

が特徴的な楽曲で、もう一つの「主の祝福」は、穏やかな調べの中でオルガンの重厚な音色が喜びを感じさせるような曲調になっている。歌詞はいずれも、牧師だった父親が92年に書いた数十編の詩から2編を選んで採用した。

鈴木は、幼少期から父親が牧師を務める教会聖歌隊の伴奏を務めた。音大卒業後は、バルセロナを拠点に現地カタルーニャ地方をはじめとするスペイン音楽やクラシック音楽など幅広い分野で世界的に活動している。フィギュアスケートのアイスショーで、鈴木を生演奏に合わせて浅田真央、宇野昌磨らが滑りを披露したこともある。

下山が自宅で主催する集会が21年から1年に1度、サグラダ・ファミリアで行われるようになったのは鈴木功績だ。「立派なパイプオルガンの音色を奏でられると、賛美歌を歌う時に大きな支えになる」と下山は話す。

## 新しい楽曲創作

鈴木が賛美歌の作曲を始めたのは、バルセロナを訪問する予定だった日本の合唱団への楽曲提供がきっかけだった。コロナ禍で合唱団の渡航は見送られたが、賛美歌は鈴木がオルガニストを務める教会で歌い継



世界遺産サグラダ・ファミリア教会の地下聖堂の入り口前で集会の打ち合わせをする下山由紀子(左)と鈴木羊子=バルセロナ (共同)

がれた。定型化されていると思われる賛美歌や教会音楽だが、歴史とともに新しい楽曲が加わっている。特に、1970年代には「ヒム・エクスプロージョン」と呼ばれる賛美歌創作活動の世界的なうねりが起きた。

昨年9月に営まれた英国のエリザベス女王の国葬では、英国国教会の首長でもあった女王にちなんで、聖書を題材にした新しい楽曲が奏でられている。

キリスト教音楽を専門とする新潟大名誉教授の横坂康彦(67)は、時代に合わせて歌われることが大事だと語る。「日本の教会の多くで使っている歌集『讃美歌21』の中で日本人が作った曲は1割ほど。女性が作った曲はさらに少ないが傑出したものがある。女性の作品が増えていくのは、世界的な流れだ」

鈴木は、横浜市の自宅に妻の介護をしながら、2人だけの礼拝を今も毎週行っている。「詩は牧師になって一番忙しかった時、(礼拝で使う)週報を埋めようと毎週必死で作った」と振り返る。

その手元には、まだ賛美歌に使われていない詩がきれいにつづられたノートがあった。新しい言葉で、新しい土地で。世界へと広がっていく祈りの歌が、出番を静かに待っていた。(敬称略、文・影山千絵、写真・沢田博之)

## 取材後記

聖堂ではキリスト教徒である記者も賛美歌に声を合わせた。オルガンの音色が建物に反響し、何重にも重ね合わせたような音の厚みを感じることができた。サグラダ・ファミリア自体が楽器であるときえいわれるゆえんだ。

この教会で毎日の祈りを支えるオルガニストは数人いるが、女性は鈴木さんだけだ。まだまだ男性優位にあるキリスト教の世界で、鈴木さんと下山さんという2人の女性が信仰の火をともし続ける姿に、体が熱くなるのを感じた。

## 共同通信配信

スペイン編 動画



通信代がかかる場合があります。予告なく内容は変更または削除される場合もあります。